

## 1 次独立・1 次従属 演習問題 3 解答例

問題 1.

$$\mathbf{a}_1 = \begin{bmatrix} 4 \\ 2 \\ 0 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 1 \\ 3 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_3 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 3 \\ 2 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{b} = \begin{bmatrix} 7 \\ 6 \\ 8 \\ 5 \\ 4 \end{bmatrix}$$

とする。このとき  $\mathbf{b}$  が  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  の 1 次結合で表されるかどうか調べよ。

解答. 等式  $\mathbf{b} = c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + c_3\mathbf{a}_3$  は,

$$A = [\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3], \quad \mathbf{c} = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \end{bmatrix}$$

とおけば,  $\mathbf{b} = A\mathbf{c}$  と書き直せる。したがって,

連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  が解をもつ  $\Leftrightarrow \mathbf{b}$  は  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  の 1 次結合で表される

となる。  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の拡大係数行列を基本変形していくと

$$[A, \mathbf{b}] = [\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3, \mathbf{b}] = \begin{bmatrix} 4 & -2 & -1 & 7 \\ 2 & 1 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & 3 & 8 \\ 2 & 3 & 2 & 5 \\ 1 & 0 & 0 & 4 \end{bmatrix} \rightarrow \cdots \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 1 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

となるので,  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  は, ただ 1 つの解

$$\mathbf{x} = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ 3 \end{bmatrix}$$

をもつことがわかる。よって  $\mathbf{b}$  は

$$\mathbf{b} = 2\mathbf{a}_1 - \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3$$

と表される\*1. ■

問題 2. (i)

$$\mathbf{a}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 2 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 2 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_3 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}$$

とする。このとき  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$  は 1 次独立か 1 次従属か調べよ。

解答. 等式

$$c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + c_3\mathbf{a}_3 = \mathbf{0} \tag{2.1}$$

---

\*1 実際に検算してみるとよい。

を考える. この等式 (2.1) が成立するのは  $c_1 = c_2 = c_3 = 0$  のときに限るならば  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$  は 1 次独立であり, そうでなければ 1 次従属である. また, 等式 (2.1) は

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3] \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \end{bmatrix} = \mathbf{o}$$

と書き直せる. よって

連立 1 次方程式  $[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3]\mathbf{x} = \mathbf{o}$  の解は  $\mathbf{x} = \mathbf{o}$  のみ  $\Leftrightarrow \{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$  は 1 次独立

だとわかる. 連立 1 次方程式  $[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3]\mathbf{x} = \mathbf{o}$  の係数行列  $[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3]$  を行基本変形していくと\*2

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3] = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 2 & 2 & 1 \\ 3 & 0 & 1 \\ 2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \rightarrow \cdots \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

とわかるので,  $[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3]\mathbf{x} = \mathbf{o}$  の解は  $\mathbf{x} = \mathbf{o}$  のみとわかる. 以上より,  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$  は 1 次独立である. ■

(ii)

$$\mathbf{a}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_3 = \begin{bmatrix} 3 \\ 8 \\ 5 \end{bmatrix}$$

とする. このとき  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$  は 1 次独立か 1 次従属か調べよ.

**解答.** 連立 1 次方程式

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3] \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \mathbf{o} \tag{2.2}$$

を考える. 係数行列を行基本変形していくと

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3] = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 3 \\ 2 & 1 & 8 \\ 1 & 1 & 5 \end{bmatrix} \rightarrow \cdots \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 3 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

とわかるので, 連立 1 次方程式 (2.2) 解は

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 3 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \text{すなわち} \quad \begin{cases} x_1 + 3x_3 = 0 \\ x_2 + 2x_3 = 0 \end{cases}$$

の解と等しい. よって  $x_3 = c$  とすれば連立 1 次方程式 (2.2) の解は

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -3c \\ -2c \\ c \end{bmatrix} = c \begin{bmatrix} -3 \\ -2 \\ 1 \end{bmatrix} \quad (c \text{ は任意定数})$$

\*2 拡大係数行列  $[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3, \mathbf{o}]$  を行基本変形してももちろんよいが, どんな行基本変形をしても定数項ベクトルに対応する最後の列が  $\mathbf{o}$  であることは変わらないので, 省略して係数行列のみを変形していけばよい.

とわかる. とくに  $c = 1$  の場合を考えると

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -3 \\ -2 \\ 1 \end{bmatrix}$$

が 1 つの解だとわかるが, これは

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3] \begin{bmatrix} -3 \\ -2 \\ 1 \end{bmatrix} = \mathbf{o}, \quad \text{すなわち} \quad -3\mathbf{a}_1 - 2\mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3 = \mathbf{o}$$

が成立することを表しているので,  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$  は 1 次従属だとわかる. ■

**注意 1.** 本演習問題のポイントは,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r \in \mathbb{R}^n, c_1, c_2, \dots, c_r \in \mathbb{R}$  に対して

$$c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r = [\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r] \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_r \end{bmatrix}$$

というように,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$  の 1 次結合を行列の積で表すことである. このポイントと 1 次結合, 1 次独立, 1 次従属の定義をしっかりと覚えておけば, 様々な問題に有用である. 例えば**問題 1**の一般化として,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r, \mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$  が与えられたときに,  $\mathbf{b}$  が  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$  の 1 次結合で表されるかどうかという問題については, 1 次結合の定義より  $\mathbf{b} = c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r$  の形に表されるかどうかという問題であるが, それは

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r] \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_r \end{bmatrix} = \mathbf{b}$$

をみたく  $c_1, c_2, \dots, c_r$  はあるかどうかという連立 1 次方程式を解く問題となる.

$\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r\}$  の 1 次独立性・従属性の判定についても,  $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r = \mathbf{o}$  が成り立つのは  $c_1 = c_2 = \dots = c_r = 0$  のときに限るかそうでないかを調べることになるが, それは

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r] \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_r \end{bmatrix} = \mathbf{o}$$

が成立するのは

$$\begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_r \end{bmatrix} = \mathbf{o}$$

のときに限るかそうでないかという連立 1 次方程式の問題になる.

**注意 2.** 連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  が解をもつことの必要十分条件は,  $\text{rank}[A, \mathbf{b}] = \text{rank} A$  が成り立つことであった. とくに定数項ベクトルが  $\mathbf{o}$  の場合は容易に  $\text{rank}[A, \mathbf{o}] = \text{rank} A$  であること

がわかるので、ただ1つの解をもつか、無数の解をもつかのどちらかである（解をもたないことはない。実際  $A\mathbf{x} = \mathbf{o}$  は自明な解  $\mathbf{x} = \mathbf{o}$  をもつ）。本演習問題のように  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r\}$  が1次独立か1次従属かという問題は、連立1次方程式

$$[\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r] \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_r \end{bmatrix} = \mathbf{o}$$

がただ1つの解をもつか無数の解をもつかという問題に書き直せるが、前者の場合が1次独立であり、後者の場合が1次従属であることに対応する。